

キボシツツハムシとムツキボシツツハムシ (ハムシ科, ツツハムシ亜科) の地理的分布と寄主植物 (補遺)

鈴木邦雄¹⁾・南 雅之²⁾

¹⁾ 〒 939-0364 射水市南太閤山 14-35 (kunimushi@shore.ocn.ne.jp)

²⁾ 〒 180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 3-17-7 (minami8535@yahoo.co.jp)

Some Supplementary Comments for an Article Entitled “Geographical distribution and host plants of *Cryptocephalus perelegans* Baly, 1873 and *C. ohnoi* Kimoto, 1983 (Chrysomelidae, Cryptocephalinae) in Japan” by K. Suzuki and M. Minami (2018)

Kunio SUZUKI¹⁾ and Masayuki MINAMI²⁾

¹⁾ 14-35 Minami-Taikôyama, Imizu-shi, Toyama, 939-0364 Japan

²⁾ 3-17-7 Kichijôji-Honchô, Musashino-shi, Tokyo, 180-0004 Japan

筆者らは、本誌30号に掲載された鈴木・南(2018)(以下「キボシ/ムツキボシ論文」)中で、既知産地に新産地を加え、ムツキボシツツハムシ *Cryptocephalus ohnoi* Kimoto, 1983(以下ムツキボシ)の分布域を本州東北地方の福島県最北部の福島市を東北限、中国地方の山口県東端部の岩国市を西南限とした。同論文中には広島県からの2件の記録を引用したが、それらの記録はキボシツツハムシ *C. perelegans* Baly, 1873(以下キボシ)の誤同定によることが判明したため、既記録から削除すると共に、以下に経緯と補足説明をする。

筆者らは、2015年9月に広島県在住の秋山美文氏にムツキボシの広島県からの記録2件(府中市父石町:中村ほか, 2000; 大竹市弥栄ダム:中村ほか, 1996)の信憑性について、「標本を実検して確認」して欲しい旨依頼した。秋山氏からは、同年10月に「キボシの誤同定であった」旨の報告をいただ

いた。筆者らは、「キボシ/ムツキボシ論文」の原稿は、その後約2年半推敲を重ねていたが、2018年2月に本誌に投稿し、6月に刊行された。その直後、秋山氏より、2015年11月刊行の「比婆科学」255号に「広島県からのムツキボシの2記録はキボシの誤同定であった」旨の記事を公表済みである旨の連絡をいただいた。筆者らは、「キボシ/ムツキボシ論文」投稿の際、その記事を見落していたため、広島県産の2記録は元のまま引用した形となった。

広島県産の記録が抹消されることによって、ムツキボシの中国地方における分布は、「キボシ/ムツキボシ論文」中に引用した山口県岩国市美和町羅漢山の記録(1986年8月4日、田中馨採集; 三好・田中, 1888-鈴木・南, 2018参照)が唯一のものとなる。筆者らは、採集者である山口県在住の田中馨氏に問い合わせたところ、当該標本は山口県立博物館に収蔵されている旨教示されると共に、その3年後に氏が同じ羅漢山で採集された採集データ未公表の♀標本(図)を寄贈していただいたので、同氏の了解を得て以下に記録する: 1♀, 30. VII. 1989, 田中馨採集。

以上のことから、本種は、現時点では、本州の東北地方北東部から近畿地方までの日本海沿岸地域を除く地域にかなり連続的に分布しているが、中国地方では山口県東北部の岩国市羅漢山が唯一の産地ということになる。今後、近畿地方、特に滋賀県・大阪府・兵庫県の1府2県および中国地方の岡山・広島2県からの発見が期待される。

「キボシ/ムツキボシ論文」に記載した既記録を通覧すると、成虫の出現期は、キボシが5月上旬～9月中旬(南西諸島ではほとんど通年)、ムツキボシが5月下旬～9月中旬でほぼ重なり合っているが、前者は5～6月、後者は7～8月に多く採



図1. 山口県美和町羅漢山産ムツキボシツツハムシ♀(採集データは本文参照)。スケール: 2.0 mm.

集されている。キボシは、かなり広い食性を示し、8科以上の植物が寄主として知られているが、ムツキボシについてはあまり明らかにされておらず、カラマツの新葉を後食するとの報告が複数ある程度である(鈴木・南, 2018)。鈴木が長野県霧ヶ峰高原で採集したのは牛の放牧場で、周辺にはカラマツ林が広がっている環境である。田中馨氏によると、山口県の羅漢山麓にも牧場があり、カラマツ林が存在するという。ムツキボシの生息地の環境にはこうした点で類似性があるようにも考えられる。なお、富山大学の早瀬裕也氏から、カラマツ自然林の分布南限は静岡県、西限は北アルプスで、それより南西地域に見られるカラマツ林は、植林などによる人工林と看做されていると教示された。いずれにせよ、ムツキボシは、特に7~8月、牧場のような草原とカラマツ林が同時に見られるような環境に注目して調査することによって、新たな産地が発見できる可能性が高いのではないかと推測される。

謝辞

秋山美文氏には、筆者らからの依頼によって広島県産の標本を実検・確認の労を執っていただいたにも拘らず、その結果を上記論文に反映することができなかったことに加えて、ご指摘いただいたことを深謝する。また、山口県産のムツキボシの記録に関して生息地の状況などについて種々ご教示いただくと共に貴重な標本をご提供いただいた田中馨氏とカラマツ自然林の地理的分布などに関して種々ご教示いただいた富山大学大学院理工学教育部の早瀬裕也氏に深謝する。

引用文献

- 秋山美文, 2015. 広島県のムツキボシツツハムシの記録の訂正. 比婆科学(比婆科学教育振興会), 庄原市, (255): 20.
鈴木邦雄・南 雅之, 2018. キボシツツハムシとムツキボシツツハムシ(ハムシ科, ツツハムシ亜科)の地理的分布と寄主植物. さやばねニューシリーズ, (30): 10-21.

(2018年9月14日受領, 2018年12月10日受理)

【短報】ヤマトオサムシダマシをハクビシンの糞から採集

筆者らは群馬県甘楽町においてハクビシン *Paguma larvata* (C.E.H. Smith, 1827) と思われる哺乳類の糞中からヤマトオサムシダマシ *Blaps (Blaps) japonensis* Marseul, 1879の上翅と腹部などを採集し、その後同所において生体を採集したので報告する。

群馬県甘楽郡甘楽町小幡: 1ex. (死骸), 19. VIII. 2018, 1ex., 31. VIII. 2018, 久保典也採集(図1, 2)

糞は筆者の一人、久保の実家にある納屋の軒下であり、他の甲虫の死骸(アオオサムシ, ムネアカセンチコガネ, サビキコリ)も混じっていた。この地



図1. ハクビシンの糞から採集された死骸。図2. 群馬県甘楽町産ヤマトオサムシダマシ。

域は多くの家にハクビシンが棲み着いていることから糞はハクビシンとみており、納屋に出入りしていたものと思われる。仮にハクビシンが本種の天敵ということにな

れば、群馬県内には現在でも捕食されるほどの本種が生息していることになる。生体は粘着式のネズミ捕りを納屋内に設置して採集したもので、本種が実際に生息していたことが確認された。

群馬県におけるヤマトオサムシダマシの記録は、須田(1987)による藤岡市での1例が知られるのみである。しかし、久保は仕事の関係で2012年に藤岡市、2013~2015年に前橋市や伊勢崎市の農家を訪問した際に、納屋などでネズミやゴキブリの捕獲器に張り付いた多数の本種の死骸を確認している。おそらく県南部の平野部を中心に広く生息していると推測されたが、すべて一般の人家内のため採集により標本を得ることが難しく、その後の進展がない状態が続いていた。今回図らずも自宅内で採集することができ、環境によっては決してまれな種ではないという確信を得た。その後の確認はできていないが、引き続き調査を進めていきたい。

最後に、本種についていろいろとご教示いただくとともに発表をお勧めくださった水野弘造氏、山本勝也氏に厚く御礼申し上げる。

引用文献

- 須田 亨, 1987. ヤマトオサムシダマシ群馬県の記録, 甲虫ニュース, (75, 76): 11.

(須田 亨 372-0006 伊勢崎市太田町 770-4)
(久保典也 370-0867 高崎市乗附町 1018-6)